

忘れられてゆく言葉から

福島和人

はじめに

福島でございます。今日は、この場においでくださった沢山の若い学生の皆さん方に、特にお聞き願いたいという気持ちで来ております。はじめに少し自己紹介をと思います。私は一九三七年（昭和二二年）生まれです。ずいぶん年配のように感じられるかも知れませんが、気持ちは若いつもりです。要するに、日中戦争で日本が中国大陸に侵略した年に生まれて、四歳の時に、教員をしておりました両親に伴われて朝鮮へ四年ほどまいりまして、対馬海峡を潜水艦に狙われる船に乗りながら、大戦が終わ

る前に日本に帰つてきました。ですから、生まれてからの四年と、その後の八歳から、日本で今日まで生きてきたわけです。戦後の復興期を経てからの豊かさの中で、一方ではどう生きたらいいのか本当に得心のいく方向がはつきりしないという世の中で育てられ、学びもし、仕事もさせていただきながら、歩んできている者です。

この機会に、皆さんに一番お話ししたいことは何かを、自分自身の気持ちに聞いてみたのですが、「忘れられてゆく言葉から」というテーマにまとまつてきました。仏教の言葉はあまり出てこないと思いますが、基本的なことにはいくつかふれることになるかと思います。ただ、おそらく皆さんがあつておられるような「仏教」のイメージではなく、生きること、本当に納得して生きること、人間としてそれぞれ自分の持味といいますか、特徴を持って一つの時代に生まれた者が、本当に納得して生きていきたい。命終わる時に、これでよかつた、ありがとう、と云つて目を瞑つていける、そういう人生のあり方を、私は学生の頃から問い合わせをしておりました。どうも仏教というと、皆さんには先ずお経とかお葬式というイメージがあるのでないかと思います。私は、お寺に生まれてもいたのですが、もつと生きること、人生を本当に納得して生

忘れられてゆく言葉から

きる道を求めている者にこたえてくれるのが仏教ではないか、という気持ちで学んできました。そういうわけで、私自身の仕事や人生での拙い経験を通して、今感じているところ、見えてきたところを述べてみたいと思います。

一 現代の日本 ー日本人からの声、外国人からの声ー

さて、私たちは、今、どういう時代、世の中を生きているのでしょうか。その世の中で、私たちは現に生活していますから、無関係ではいられないわけです。部屋に閉じこもついていても、その部屋を取り巻く周りの世の中とはいろいろと関係しています。食べ物を始めとして、部屋にいてテレビを見ているだけで、社会のすがたがそこに映し出されます。

少し上の年代を含めて私の世代の人たちと話をすると、とにかく戦後、いろいろと頑張ってきたとお互いに云います。戦争中から戦後にかけては、食べ物だけでも本当に大変でした。私も、じゃがいもを四つ五つ、茹でたのを学校に持つていって、それ

がお昼の弁当でしたが、それでも、お昼が楽しみでしかたがなかつた、そういう時代を子供の頃過ごしていますから、戦後は、一生懸命に頑張つてきて、今は食べ物の溢れる社会になつてゐる訳ですが、そのうらに大変な努力があつたことだけは忘れられないわけです。それは、言つてみれば、戦後復興から平和条約による独立後の池田内閣の時に始まつた高度経済成長へという開発と生産を中心とする国と政府の方針ですね、その後、中曾根総理の時代に、余裕が出てきたからもつと生活を楽しもうということで、リゾート法ができ、それからもう少し経ちますと、自然の開発と人口の移動で荒れて衰えた全国各地を見直し、もつと地方を大事にしようということで、竹下総理が、ふるさと創生ということを提唱しました。最近の森内閣では、みなさん御承知のように盛んにIT革命と呼ばれています。国家としての政策レベルでは、そういう旗を掲げて向かつて行く姿は、戦前、軍国日本頑張れと言つたのと目的は違うようでも、今日も似たようなところが、つまり、国民の大多数が自分達があまり気づかぬ中に、一緒の方向に集団となつて走つてきたという傾向を今でも引きずつてゐるようで、私はなきれない気持ちがしていきます。

忘れられてゆく言葉から

日本人の声 新聞やテレビを観たり、あるいはいろいろな年代層の方と話をする機会がありましても、これでよかった、と自画自賛しているのはたいてい一部の政治家で、これからはこの方向だとか、こうして生きていくんだ、という明るい声、表情が、私生活でも社会全体の雰囲気からも感じられなくなつてきました。しかし、私などの青年時代の頃には、日本人の中に伝わってきた文化、中でも仏教・道徳などはもう古いのだ、だから古いものを捨て、ともかく新しいものを求めて生きて行くことの方が重要だ、文化生活、お金があること、欲しいものを買えることが幸せになつていくことだ、という風潮が支配的になり出しました。そのような昭和三〇年前半の時期に、私は学生生活を送つていたわけです。しかし、そんなものだろうか、そんなことで、人間は自分の人生を納得できるのだろうか、というような思いがありました。そういう中で、仏教といつても、それを自分のいのちや人生の方向を見い出せる、その力にならないものでは困るという気持ちがありまして、そういう勉強の仕方をし、また教育、研究の上に少しでもそれを生かしたいと思つてきました。

ところが、どうも同年代でも、そのように考えていた人の方が少なかつたとみえて、

私はずっと少数派で生きてきたように思われます。ともかく、たっぷりモノがあり余るようになつて、土地までがお金もうけの手段になつて、乱れに乱れて、ついにそのバブルが一〇年前に弾けたわけですが、それから、最近の一〇年は“失われた一〇年”と言われています。いろいろやつていいのだけれども、本当に取り組むべきことに取り組んでいるのかいなか。そのことに、社会的にも個人的にも自覚的でない人が多くなつた、そういう時代になつていて、とよく言われます。文学者は「不透明な時代」だと。「不透明」というのは、もともと文学の世界から出てきた言葉です。自分のやつたことにはつきりと責任が取れなかつたり、その原因などもはつきりしないことを指し示して言うようです。どうも、私達日本人自身、これから歩みの方向が確かに見えてこないと言う状態になつていて、ということかと思われます。

皆さんは、「そんなことを言われても、私は一九八〇年前後の生まれで、その頃はまだ大人になつていない」と思われるかもしれません。しかし、実を言うと、歴史の恐ろしさというものは、まだ、自分が生まれていなくても、大人になつていなくても、親の世代、祖父母の世代からやつてきた歩みが、意識するにしろしないにしろ、結果

忘れられてゆく言葉から

として、すべていろんな形で、自分の上に宿っているという事です。過去が自分となつていてと言いましょうか。家庭の中での生活やその雰囲気、おじいさん、おばあさんの言葉や姿、学校で教わったことや社会からの情報などが自分の中身になっている。“私に関係ない”とは言えないということになります。ですから、今日は、少し近代や現代の歴史的なことがらにも触れたいと思います。

外国人からの言葉 カール・ベッカーというハワイ生まれで京都大学のアメリカ人の先生がいます。専攻は私はよく存じませんが、主に日本文化でしょうか。去年、雑誌『文藝春秋』で、今日の日本人の姿や、文化や伝統を中心とする日本についてメッセージを、評論の中で述べておられました。その中で、たとえとして、日本について、こういう状態ではないかと指摘しています。その趣旨を要約しますと「不透明な時代とか自信がなくなつたとか、今、日本の方々がよく口にしているが、私から見ると砂漠の中を日本人は今、どこに水があるのか探し求めてウロウロしい。ところが、実は自分の腰にちゃんと水の入つた水筒を括り付けて持つているのに、それを忘れてどこかに水はないか水はないかと、砂漠の中を彷徨つている感じがしてならない」と。

批判というのではなく、日本文化、歴史、日本人の生活の中にはいいものがありますよ、飲むべき水がちゃんとあるじゃないですか。持っているじゃないですかと、それを忘れてはいませんか、という意味で、激励してくれています。外国人からのそういう言葉はベツカーナ教授だけでなく、新聞、雑誌、テレビなど情報でもよく目に入ります。今も、私たち日本人は外国人でも特に欧米人から何か言われると、たいていああそろかとなります。が、私は外国の方に評価されて喜ぶという気にはどうもなれません。「出羽守」信仰には賛成しかねます。アメリカでは赤ちゃんが生まれたら、すぐ別室で育てられる。だから自立心が育つ、とかイギリスではこうだったとか……。では……だから”とこういうのを「出羽守」信仰と言います。そう思う前に、まずは日本人としての私自身においてはどうなのか、と問い合わせてみると、これが大切ではないか、と思います。外国の言語や文化を学んでおられる学生さん程、日本の文化につき質問される機会が多くなると思いますので、尚更そう思います。各国、各民族、更には一人ひとりの人間が持っている個性を見いだし、相手の持ち味も見いだし生かしていくという気持ちで、生きていかないといけない。そのことが広くはこれから国

忘れられてゆく言葉から

際社会・文化の中で生きるという課題につながっています。そこで、ベッカー教授の話を励みに自分の足元を見つめる意味で、次に日本の社会、日本人というものを、特に、戦後に絞って考えてみたいと思います。

一 「子どもが生まれる」から「子どもを作る」へ

この見出しが、「子どもが生まれる」から「子どもを生む」と書いてもいいのですが、決して言葉の揚げ足をとるつもりではありません。言葉にはそれを用いて話す人の思い、生活、人生が宿っている。その人の感性も見えてきます。単に記号としてだけではなく、自分を表現する方法としても大事なものです。ですから、ここでは、言葉に焦点を絞ってお話しを致します。

皆さんは、これから望ましい男性に巡り会い、人生を共に歩みたいと思つておられる方が多いだらうと思います。そうでもあるかもしれません…。あと数年後にお母さんになる方も、きっといらっしゃると思います。皆さんは「子どもを生む」

とか「作る」という言葉と「子どもが生まれる」という言葉では、どちらが感じがいいですか。実は、かつての日本では、子どもが「生まれる」と言いました。もう少し丁寧には、「子どもに恵まれる」「子どもを授かる」という言い方をしてきました。それがいつ頃からか、子どもを作る、子どもを生む、子どもを何人にしようか、と言うようになつてきましたが、文法的にも違うんです。言葉ですから、それを使う人の割合が一〇〇%とか〇%という風にはなりませんが、特に若い夫婦の間で「生む」「作る」という言葉が支配的になつてきました：と。日本では昭和三五年前後（一九六〇年）頃から変わりだしたと言われます。年配の方は比較的そういう言葉は使いませんが。それはどんな意味を持つかということですが、受ける感じだけでも、何か違うんですね。皆さんはどうですか。では、どう違うか。実は、これによつて、子どもに対する見方、受け止め方が変わっていくことがあります。「生む」とか「作る」というのは自由意志、自分の意思が中心になる。生まれると、自分が中心とう感じではない。授かるもそうです。そのあたりのことについて、参考になるのが、鈴木大拙という方の見解です。

忘れられてゆく言葉から

鈴木大拙の言葉から 鈴木大拙という禅の研究者で明治時代からアメリカに行かれて、広く欧米の方々に仏教の教えを翻訳しながら、わかりやすく説かれた世界的に高名な先生がおられます。アメリカやフランス、イギリス、ドイツに行けば、少し人間や人生を考える人であれば、たいてい知つておられるそうです。私も学生の頃、講演を二回ほど聴きました。昭和三七、八年頃、よく日本的一般の市民を相手にも講演をされました。現在もその時の講演録が、カセットテープのシリーズで、「最も東洋的なるもの」という題で、出ています。

「生む」「生まれる」ということに焦点を絞りますと、その講演の中で、次のことと言つておられます。日本語と英語の両方から比較しつつ語つておられます。例えば、自然とか無為自然という言葉をとり上げながらですが……。無為自然は、中国の老莊の思想、日本へは道教という宗教としても古代に伝わっています。インドの仏教を中国人が受け入れ、漢字に翻訳していきます。仏教は仏法とも言います。「法」の方が中心ですが、眞実そのものを「法」といいます。その法に、シッタルダという人がこれが眞実だ、その眞実が自分の上にも世界中の上にも働いているという

ことに目覚めた。御存知のように悟りを開かれたということですね。その法にふれて正しいこと、間違っていることに気づかされる。法は万法ともいいますが、万は無数つまり、限りなしという意味で、限りなくはたらいています。淨土真宗の本尊とされる阿弥陀仏の「阿弥陀」は、無限と意味は一緒です。その法を仏様が教え説かれたので仏教というわけです。シッタルダ太子が十一月八日に目覚められた。現在は、成道会をその日に行います。法に目覚められて、これはすばらしいと感動された。そして、身近にいた人達に乞われて説きはじめられました。目覚めると明るくなる、自分が見えてくる。社会の実相が見えてくる。具体的に何をしなければならないかもわかつてくる。自分でしてはいけないことや間違っていることにも気がつく。人間には様々な人がいるから、いろんな形や方法をとつてそれを知らせようとして下さった。それが教えとなつて、たくさんのお経が生まれた訳です。ですから、仏教ではその教の元としてこの法が大事とされます。

その法のはたらきを古代の中国では無為自然、つまり、いらぬ手出しをしない、ありのまま、そのまま、人間がとくにあれこれ手を加えなくてもそうなつていく、老子

忘れられてゆく言葉から

という方は、それを「道」と言い、あらゆるもの的根本だと言いました。この方は、論語で有名な孔子の先輩格の方です。お弟子さんがある時、老子に初めて会って帰つてこられた孔子に、「老子様はどういう方でしたか」と聞くと、「龍の如きお方だつた」と。龍とは人間の力の全く及ばない、中国の巨大な伝説的架空の生き物で、龍神と呼ぶように、神としても畏れ崇められていました。スケールが大きくて自分の力ではとても理解の及ばない程偉大な感じがしたと…。ですから孔子様でも頭が上がらなかつたという方です。孔子の教えは私たちも学校で教わっています。「己の欲せざるところ、人に施すことなけれ」などという言葉は皆さんもご存知でしょう。高校で倫理や漢文で習われた方が多いと思います。自分がしてほしくないことは人にしてはいけない、と【論語】に出てきます。ずっと以前から私達日本人の生活の中にも伝わつてきています。ただ、最近は段々忘れているわけですが、なぜ人を殺したら悪いのかと一七歳の少年がたずねたということですね。では自分は殺されたいですかと聞くと、心底“はい”とこたえるようなそんな人はいないと思われます。正直なところ自分がいやならそれでは人もいやでしょうと。生命という視点にたてば、至極簡単に答えが

出てくるわけです。

言つてみれば、結局のところ、特別に努力しなくとも自然にそういう思いが出てくる。例えば、皆さん、ウソをついたことのない人はいないと思います。お父さんやお母さんに對して…、幼少期の成育過程の中で子どもは必ずと言つていい程、ウソをつくことがあるそうですから。叱られて一回でやめる人もいれば、何回もかさなつて困る人もいるわけです。社会に出て行つてから、ウソも方便と言つて、やつていると、それは信用問題になつてくるのですが、とにかくウソをつくと気持ちが悪い。バレたらどうしようかと。ウソをつかれて嬉しかった人はありますか。ウソだとわかつて、「ニコッと笑つて、よかつた、あの人は信頼できる」と思う人はいないでしよう。普通は、「ウソつき」「信用できない」と思う。ウソをついた人も、心の底から嬉しいと思う人はいないです。"愉快犯"という例外は別として。そういうことが、本性的に私たちの心の動きの中になりますね。人が自分のことを思つてやつてくれたことがわかると、うれしい。親切をすれば、された方も、した方も腹は立たない。よかつたなと思う、形としてはすぐ目につかない場合もあるけれども。たしかに人間関係の

忘れられてゆく言葉から

中にもそういうことがある、動植物でも競いつつ助け合って生きていますね、それを自づとそうなっている事実、そうなってくる道理として、無為自然と老子が語ったのだと言つてよいと思います。

他力について 浄土真宗の教えでは「他力」ということを言います。五木寛之さんが「他力」という本を出してベスト・セラーになっていますが、他力とは、眞実の働き、法のはたらきのことを言います。先程もふれましたが、法は自分の中にも、人間関係の中にもはたらいています。見捨てておけない、助けてあげたいという気持ちも法のはたらきです。そうした捉え方は、仏教だけではなく東洋思想の根底にあるようです。

皆さん御存知のように西洋の考え方の元にはキリスト教があります。中心は創造主、この世界をつくり人間をつくり男をつくり女をつくった主なる神を言う。日本でいう神様とは違います。日本では田んぼの神様、水の神様と呼ぶように、人間にとつてその恩恵に頭を下げずにおられないものや、風神、雷神といった人間の力を越えた恐ろしいものや、すごいもの、恵みをくれる一方で、洪水をおこすものをも神様という。自然についてだけでなく、とても人間わざと思われぬ程の偉大なことをした人も神様

として祀る。徳川家康も日光東照宮に神様として祀つてある。西郷隆盛にも西郷神社がある。西洋のキリスト教の神様とは根本的に違う訳です。

それで、中国で言われた無為自然ということから展開して、鈴木大拙は、次のように言つておられます。キリスト教の教えによつて歩んできた文明、英語圏の文化の人々は、「生む」という言葉をボーン、メイク・ベースと言う。ところが、「生まれる」という英語はありますか。ビ・ボーンというと生産されるとなりますね。能動か受動かということが問題になります。英語では、神様が人間をつくる、人間はつくられたもの。従つて、生まれるという言葉は英語にはないそうです。詳細は英文科のみなさんに任せますが……と云うことはそういうものの感じ方、受け止め方がないということになりますが、そこに問題がひそんでいるように思われます。

この作る、産むという言い方は人間の自由意思が中心になつた言葉です。私のつくった子ども、産んだ子どもだと。では、子どもの方からはどうなりますか。頼みもないのに勝手に私を産んで……勝手に作つて……と文句を言う子が出てくることになります。ところが、逆に生まれる、授かった、恵まれたと受け止めるとき、かつて子宝と

忘れられてゆく言葉から

いう言葉が生きていたように、宝物だということになります。そう親達に受け止められてきた人は、きっとどこか安定した心を持てているのではないか、と思います。しかし、それでも私達人間は自分という存在を無条件で受けいれずに自慢したり卑下したり、比較したり、慢心を抱いたりします。それを煩惱といいます。私の方が美人だというのは自慢、高慢です。私は所詮だめですというのは卑下慢です。あなたも私もよく似た程度だというのは等慢といいます。お釈迦様は、自分の存在を、各々にとつて、かけ較する心として戒めておられます。お釈迦様は、自分の何れをも人と自分を比べえない唯一の命として大事にしなさいと言われる。それはなぜかと云うと、授かった命だからです。沖縄では、現在でも「ぬちどう（命）宝」と言うそうです。つまり、この「授かる」という言葉には、自分の自由意志ではどうにもできない、自力では及ばないもの、先程申しました無為自然、仏教での自然法爾(じねんぽうじ)という言葉に通じる訳ですが、言つてみれば「他力」のはたらきを自分の命の上に感ずるということが、背景にあるわけです。

ところが、親の方が作つたと思つていると、子どもの方は頼みもしないのに勝手に

作つて、ということになります。事実そのように言い返す子も増えてきていると聞きます。それは、いろいろ考えてみると、その子の親自身の意識が、私たちの年代あたりからになりますか、人間の命を、生き方の根元になるところから省みることのない意識が、昭和三〇、四〇年代から支配的になって、他からの心や、他への思いやりを失い始めた事に因るよう思う訳です。確かに、生活を物の面で豊かにする、便利にするということもある面からは大事なことでした。しかし、そのことにばかりに走つたツケが、心の要を忘れ、おかげさまで、ありがたいという気持が薄れると共に言葉も忘れられ、延いては、今日の飽食の時代にも繋がってきたことになります。

高光大船の言葉から 高光大船という真宗者がいらつしやいました。私の亡母は、その先生の導きを受けております。五木寛之さんが、最近の著書で、「自分は人の手本にならないが、見本にはなれる」という大船師の言葉を引用されて、そういう心で生活してゆくと肩の荷がおりて生きていかれるという例として、その高光大船の言葉を折にふれ紹介されているそうです。

その高光先生が、こういうこともおっしゃっています。例えて申しますと、やがて

忘れられてゆく言葉から

皆さんがお母さんになられたとして、赤ちゃんが泣いたらどうされますか。赤ちゃんは、言葉が話せませんから、どんな場合でも泣くしかありません。それで、高光先生は、どうおつしやるかというと、赤ちゃんがおなかが空いて泣きはじめたと感じたら、そういう時にはおっぱいを与えたらいといと。まつたく当たり前のことですね。おむつが濡れたせいだとわかれれば、おむつをとり換えたらいといと。気持が悪いから泣くのですから…。特別に病気になった時は、これはまた泣き方が違うでしよう。この場合はお医者さんへ、ですね。暑苦しくなつても泣く。お母さんの顔をみたくなつて寂しくて泣く。これが、言つてみれば、赤ちゃんの命から発する法則です。泣く様子から、おなかが減つたのがわかれればお乳を与えるというわけですね。何も難しいことを言つておられるのではないわけです。

ところが、二年ほど前、たしか『AERA』という雑誌でしたか、若い夫婦が、赤ちゃんが泣いてやかましいからと、睡眠薬を飲ませたという記事を読みました。皆さんはどう思われますか、少し変だと思いませんか。泣くのを止めさせるのにはいいかもしれませんよ。しかし、赤児の身体にそんな薬物が入ると脳や神経に影響が出ませ

んでしょうか。仏教の教えを聞いて生きるというのは、この場合ですと、なぜ泣いているのか、その現象・結果からその原因をよく考えて、そこで必要なことをすればよいわけです。例えばおなかが減つて泣いているとすれば、時間からみておっぱいなんだなと気がついて飲ませるとゴクゴクと飲んで、すやすやと眠ります。もつと泣きなさいと言つても泣きません。そうしてよく育つ。単純なことのようですが、そうしたこと、つまり法ということが、私たちの体や心、人間関係にも凡てにはたらいている。肝心なのはその事実に気づき、そして、その法則にすなおに従つて、処するかどうかということになりますね。自分の都合だけから考えることは法、真実に反することだと、お釈迦さんは説いておられる訳です。どこの国でも民族でも同じです。三歳、五歳と年齢に応じて育つ上で、大事なことが次々と出てきます。それを自然の道理、この場合では、いのちに宿る法則と言つてもよいと思います。些細なことのようで、地球上の赤ちゃんのすべてに通ずることですからこれは物凄い力ではないですか。

少し言葉が過ぎたかも知れませんが、こうした道理を軽視してきた大戦後の五〇年間だつたと私は思います。とくに、二二二一、四〇年はほとんど忘れてきた。仏教は、

忘れられてゆく言葉から

本当は、そのことに気が付くことを尽きると言つてもよいわけです。お釈迦さんはそれに気がつかれた。学校では、先生の話はわかる方がうれしい。そのためには頭や心がすつきりした状態で講義を受ける方がいい。それには、どういう生活をすればいいか。バランスのとれた食事をする。生活のリズムを考える。心底から願つてることに、いきいきと取り組んでいけば元気になる、ということも法のはたらきです。仏法はそういうことを願つてきてているわけです。お経とか教義とか儀式とか、いろいろと内容やかたちを伴つて歴史の上では展開してきていますが、もとに戻ればそれだけのことと、あえて強調したいと思います。

三 日本の中での文化と伝統 —自分らしさの再発見のために—

イランのアリ・マジエディ駐日大使が、一〇月二七日の毎日新聞に「世界の目」と題して、書いておられました。イラン人として、日本の発展に学びたい。日本人自身は良い習慣、良いマナー、良い言葉、深い考え方をたくさん持つてきたはずなのに、

若い人たちの方で少しあやしくなってきたのでは?と。日本は良い伝統をいろいろと
社会に持っている国ではないか、と日本について思います、と。

実は、私にもアメリカ人に、妻子も含めて三五年来のつき合いをしている友人が今、
アリゾナにいます。東洋や日本の美術を勉強しています。この中に文化クラブや、運
動部に入っている方もあると思いますが、その中に茶道、華道、香道、書道と呼ぶよ
うに道のつくクラブがいくつもあると思います。道という漢字は人間が生きるべき正
しい筋道という意味があります。ですから、道がつく芸道などには、それを通じて、
人としての生き方や心を培っていきたい、そういう願いがこめられています。香道で
も、お香を仏前で焚くように、仏教と関連があります。お花もそうです。歌舞伎でも
能楽でも、道がつかなくとも仏教からの人間への見方や願いが流れています。一方、
スポーツには、武道があります。柔道、剣道、弓道等があります。古くは武士道など
ともいいます。人間が生きる道を学ぶ、生き方を深めていく。日本の伝統的な文化は、
大抵そういうものを持っています。また、この前のシドニー・オリンピックの女子マ
ラソンで優勝した選手がいましたが、マラソン道という言い方はありませんが、監督

忘れられてゆく言葉から

や選手の高橋尚子さんのコメントを聞いていますと、そこに人生との取り組みがありました。マラソンを通して生きる道を学びとろう、見い出そう、としておられるようです。日本人がスポーツや文化に取り組む時、「道」と名づけることが多い。そういう精神と内容をもつた文化や生活のかたちを、日本人はずっと持ってきてる。外国人の方も日本のそういう道や世界にひかれて学びにくる場合が多いようです。

皆さんもいろいろお稽古ごとや趣味を持つていてると思いますが、たとえ、「道」がついていくなくても、それを学習し、体得しつつ、その世界の広さや深さを知り、自分に対する見方を深める。そして、こんな良いところがあつたか、まだ努力が足りない、と気づいていく。そういう文化を、学校だけでなく家庭の中にも地域社会にも、それを持つていた国民です。そういうものを欧米の方はすごいと言うわけです。そうした生活の文化が、皆さんのおじいさん、おばあさんの世代までは確かにあつたのです。しかし、皆さんのお父さん、お母さんのあたりの世代から少し怪しくなる。そういうことをちゃんと習った方は別ですが。茶道、柔道、といった「道」のつく世界だけでなく、仕事に取り組むことを通して人生を学ぶ、自分を深めていく世界があり

ます。朝四時から起きて魚市へ、昼は少し休んで、夜おそらくまでおいしい寿司を作つてお客様に満足してもらうことに、自分をかけている職人さんも沢山おられるようです。ただ、この機会に皆さんにお尋ねもかねて申し上げたいのは、昨年、一昨年くらいまで皆さんは高校生だったと思いますが、あのルーズ・ソックスは大学に入るとやめますね。“おじさん”の年齢の者から見ると、冬は暖かそうだな、夏は暑苦しいだらうなと思われます。まあ、放つといってくれと言われそうですが…。しかし高校を卒業すると皆さんいつせいにパツとやめますね。なぜでしょか。中学生にもはいている子はいないようですね。高校三年間のファッショն、女子高中生のしるしとしてはわかるような感じがします。これを一過性の文化と言つてよいと思いますが、何年間か経つと終わる。音楽でもポップスなんかですと青年期を過ぎるとやめる人の方が多いのではないか。アイドルを前にして、ワード、キャーと熱中している人は殆ど若者です。その年齢、その時期に一生懸命になつて、夢中になる。そのことを、無意味だという訳ではありません。それに成長の段階で心や感性の栄養になる部分は確かにあると思つています。

忘れられてゆく言葉から

他方、一生涯、少女時代から成人しても、おばあさんになつても年齢に応じて、一生ずつと続けていけるものもあります。先程も申しました華道や茶道など先生になって教えている人も沢山おられます。剣道でも柔道でも七〇歳になつても続けておられる方もけつこうおられます。自分の生きがい道だと。山下泰裕選手は、柔道はただ相手に勝てばいいというものではない。相手を尊重して共に鍛え合い人間性を培うそういう柔道の本当の心を世界に伝えたい、と新聞で語っていました。歴史を学んでも確かめられることですが、私にはその元には仏道ともよばれる仏教の心があるよう思われてなりません。ぜひ、そのような一生涯続けていける趣味、仕事と、その年齢、年齢にふさわしいものの両方に取り組んでいかれることを、お勧めします。

ただし、皆さんの前には案外自分では気づいておられない大きな困難があるように思います。たとえばダムを思い浮かべて下さい。宇治川の宇治橋の上流に天瀬ダムがあります。美しい所ですから遊びに行かれた方もあるかと思います。琵琶湖から瀬田川が宇治川になり、そこへ木津川、桂川が合流して、淀川となつて大阪湾に注いでいます。かつて、ダムができる前は大阪湾と琵琶湖の間をウナギとか鮎が川を上つたり

下つたりしていたと、聞きます。一九六四（昭和三九）年にダムが建設されてそれができなくなつたのです。そのダムにあたるようなものとして、つまり伝統や文化に接する前に遮断されてしまい、それを魅力的だとは思えないほどに、今は楽しく感じられる情報や文化がどんどんつくられて皆さんの中に提供されてくるのです。ポケ・ベルどころではなく、とにかく情報文化が皆さんのような若者を取り込んでしまつてゐる。品のない言い方をすればお金儲け絶好のターゲットとされている。情報過多、情報禍という言葉がそれに当たつている気もします。私達年配の者には、まだ何とか潮流まで辿り着く文化的社会的環境に恵まれていたように思います。何が本当か、何が命かということを幸いに教わることが出来、気づかされたこともあります。皆さんに、そのような環境が無いという訳ではありません。しかし、皆さんは情報過（禍）によつて自分達のとりまかれている状態に、案外気づかず、そのためには源流への熱い気持を削がれておられるのでは、と言つては言い過ぎでしょうか。そういう点では過剰な情報が一種の障害となり無意識にその被害を受けておられるよう思えてなりません。私の誤解ならば謝りますが…。そうなりますと大学で勉強をしていても面白い

忘れられてゆく言葉から

ことが少なくなると思います。それは源流からの音が聞こえない、耳に入らないからです。いきいきしたいのちあるものに触れていく。それには文化の源流に触れることが大切だと思います。ミネラル・ウォーターで御存知のように、源流の水は何といつてもおいしいですね。ですから、一生つきあつていける、取り組んで深めていけるものと出合うことが大切になつてくるわけです。もちろん、それには努力がいります。しかし、取り組んでいくうちに自分の弱点に気がつくようになり、又長所も見えてくる。そういう根元をたどり掘り下げ、わからないことは聞いていくことが皆さんのように若い時こそ大事だと思います。

おわりに

「忘れられてゆく言葉から」ということをテーマに、二二三、四〇年の時代の変化を念頭にお話しました。子どもを授かる、子どもに恵まれるという言葉を聞くと、至らない親であるにもかかわらず、よく育つてくれて、と心の中で思う謙虚な親の姿が

浮かんできます。そして、子どもをかけがえのないものと大事に思えるようになつてくるのではないか、と思います。ところが、今、現実にはそうではなく、親が自分の都合で生むとか、自分の都合で泣き止ませようとするような意識がどうも多くなつてきたように思われます。現在の不透明なと言われるこのはつきりしない、事態の原因の一つはそこにあるような気がします。皆さんは、それに気がついて、逆さまになつているような見方や在り方をのり越え、変えて行つてほしいと思います。私などの世代は、皆さんの世代にバトンを渡す責任を負つていると思います。そして、私達自身の世代にきびしく問われ求められているのは、本当に渡すべきバトンを先の世代から受け取つたかどうかを自分の中に確かめ、確実に「お願ひします」と手渡さねばならない、ということです。やがて皆さんも子どもたちや、更にその次の若い世代に、バトンを渡していかないといけないことになります。世の中の風潮にただ流されず、その流れに乗りつつ、自分の本当の願いによつてその流れを切つて泳いでいく智慧と元気を、仏教に根ざした文化や伝統や生活の中からも、学んでいただきたいと思います。今日の話の中で、"ああそうちかな"とか "あれつ"と思うところがありましたら、少

忘れられてゆく言葉から

しでも生かしていただければありがたいと思います。長時間どうもありがとうございました。

—2000年10月31日—